

日本社会福祉教育学会

NEWS LETTER NO. 19

Japanese Society of Social Welfare Education

事務局 〒270-0198 千葉県流山市駒木 474 江戸川大学総合福祉専門学校 原田聖子 研究室

TEL 04-7136-1019 E-mail info@jsswe.org <http://jsswe.org/>

2013年10月15日発行

1. 巻頭言

社会福祉教育に求められる「創造性」「想像性」「統合性」の醸成

監事 福山和女（ルーテル学院大学）

社会福祉教育について今、おもうこと。

現在、社会福祉を取り巻く環境の変化はめまぐるしいものである。この変化の速度を敏感にキャッチし、その前方へと先んじて進むことのできる実践現場の専門家や教育現場の研究者を育て上げることが、社会福祉教育には求められるようになったと思われる。

社会福祉教育が、社会福祉学についての先人の知恵と論理を伝承することをその機能とするのは当然であるが、その基盤の上に社会福祉学をさらに深化させ、進化させるために、「想像性」や「創造性」を活かした二つの力をバランスよく発揮し、醸成したものを「統合性」に向かわせ洗練し、新たな芽を育むことができるような教育が望まれる。

たとえば、児童虐待について従来の方法で援助することも可能であるが、その児童はすでにこれまでとは異なる社会環境に生き、生活環境が全く異なり、対人関係も、おのずとその質は大きく変容しているだろう。携帯がスマホに置き換わったくらい、その対応の仕方を180度変えなければならぬだろう。

学生たちにこれまでの論理の応用を教育しても、あまり功を奏さないかもしれない。むしろ、異次元を想像させ、新たな工夫を創造させる教育が必要であろう。しかしその工夫は新たなもので、試みていないことから、その効果や成果を予測することは難しく、非現実的なものであるかもしれない。この場合、旧来の工夫とこの新しい工夫とを折衷させ、統合的工夫を編み出せば、その成果を容易に予測できるかもしれない。

先達の知恵と論理にしがみつくだけでなく、それらの限界と効用を明確にし、新たな工夫と合わせて相互に補足する。この方法で教育を行えば、新次元の現象に対する新たな取り組みを、想像に基づき創造することも可能となるだろう。その結果、児童虐待現象も解消されることとなるかもしれない。

次世代に来る新しいパラダイムはなんだろうか。教育を考える仲間とは、こんな夢も語り合いたい。

目次

1. 巻頭言	福山和女	1	6. 会員の声～私の福祉教育～	15
2. 第9回大会開催される		2	小林明子・貴島日出見	
大会を振り返って	藏野ともみ・佐々木幸	3	7. この一冊：私が推薦します！	16
大会参加者の声	西川友理	5	田中秀和	
3. 2013年度理事会報告		5	8. 社会福祉系学会連合より	17
4. 2013年度総会報告		7	9. 2013年度第4回春季研究集会の予定	18
5. 学会探訪⑧～日本マイクロカウンセリング学会～保正理事		14	10. 学会誌投稿募集・編集後記	18

2. 2013年度 第9回大会 開催される

テーマ：社会福祉士養成課程の改正について検証する（2）

－全員参加で創る教育課程開発の試み－

2013年8月31日（土）～9月1日（日） 丸紅多摩センター研修所

第9回目となる大会が、上記の日程・会場で開催されました。

今回は「社会福祉養成課程の改正を検証する」という昨年度の大会テーマを継続させつつ、今年2月の第3回春季研究集会で学んだルーブリック評価の手法を活用して、「その科目を学んで何ができるようになるか」「どれくらいできるようになるか」を明らかにすべく、まさに参加者全員で教育課程の具体的な構造について考え、話し合う機会となりました。

当学会としては、初めての合宿形式の大会として企画され、参加者は科目ごとに分けられた7つの分散会のいずれかのメンバーとなり、夕食・朝食・昼食を挟みながら2日間にわたるグループセッションを延べ6時間前後行い、ルーブリック（教育目標を体系化して表わしたマトリックス）の作成に取り組みました。

今回、取り上げた科目は、「現代社会と福祉」「社会調査の基礎」「児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度」「精神保健に関する制度とサービス」「相談援助の基盤と専門職」「地域福祉の理論と方法」「介護の基本」の7科目。参加者は40名でしたが、通常の学会にありがちな部分参加がほとんどなく、多くの方々が最後の分散会報告集会・閉会式まで熱心に参加されました。

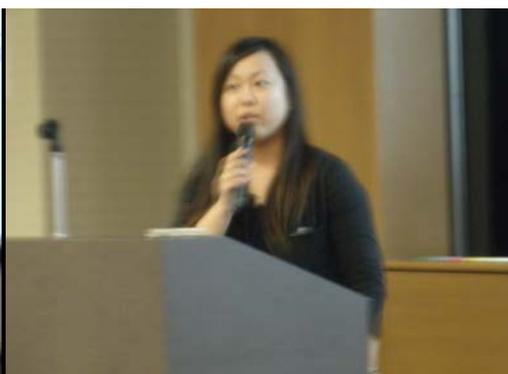
福祉関連科目におけるルーブリックの作成という試行的な取り組みでしたので、手探りで進めている感もありましたが、この集中的な共同作業により、社会福祉教育の到達目標を学生の行動レベルで具体的かつ構造的に考える思考の枠組みは体感できたのではないかと思います。

鹿児島で行なわれる来年度の大会も、この取り組みを前進させていく方向で計画される見込みですので、会員の皆様方の積極的な参加が期待されます。

一方、大会2日目の午前に行われた自由研究発表では「社会福祉教育実践研究」「社会福祉教育理論研究」の2つの分科会で計7題の発表が行われ、今回から創設された「大会賞」に参加者の投票で2名の発表者が選出され、閉会式の場で表彰されました。



学会長挨拶・問題提起 川廷宗之会长



問題提起 小関久恵会員

自由研究発表 大会賞受賞演題

社会福祉教育実践研究 『『現場実習』の実効性を高める実習教育ツールの開発（1）』

日本福祉大学 江原隆宣・高梨未紀

社会福祉教育理論研究 「戦後の社会福祉教育の変遷—東洋大学の社会福祉教育史に関する第二報—」

新潟医療福祉大学 横山豊治



分散会の1コマ



分散会の1コマ

大会プログラム

【1日目】 8月31日(土)

ワークショップ1 「講義科目を学生参加型で運営するには」講師：川廷宗之（大妻女子大学教授）

ワークショップ2 「統計感覚を身につけるために」講師：杉山克己（青森県立保健大学教授）

山下匡将（名古屋学院大学講師）

開 会 式（学会長挨拶・オリエンテーション）

総 会

問題提起 「ルーブリックを活用した教育課程開発の試み」

川廷宗之（日本社会福祉教育学会会長）・小関久恵（日本社会福祉教育学会会員）

分散会Ⅰ

夕食・懇親会

【2日目】 9月1日(日)

自由研究発表 7演題

分散会Ⅲ

分散会報告集会

閉会式・自由研究発表大会賞授与



大会を振り返って

第9回大会事務局 蔵野ともみ・佐々木幸(大妻女子大学)

I. はじめに

日本社会福祉教育学会第9回大会は、昨年度の大会から社会福祉士養成課程改正の課題を引き継ぎ、「社会福祉士養成課程の改正について検証する(2)ールーブリックを活用した教育課程開発の試みー」というテーマで開催致しました。8月31日、9月1日に、東京都八王子市にある丸紅多摩センター研修所を会場に宿泊形式で行いました。2日間を通して参加された方は延べ40名でした。本大会は、大会参加者全員が分散会(グループセッション)に参加するという試みを行い、これまでとは異なるプログラムでの運営となりました。

大会プログラムとしては、8月31日は午前中の2つのワークショップから始まり、午後は総会后、問題提起「ルーブリックを活用した教育課程開発の試み」として、川廷宗之学会長および小関久恵会員(東北公益科学大学)から社会福祉士養成教育実践に対する問題提起と、教育評価方法の一つであるルーブリックの作成について提案と説明がなされました。

本大会は、大会参加者が、自らが担当している科目あるいは関心のある科目に分かれ、大会2日間で各科目のルーブリックを作成していく試みを行いました。1日目の問題提起後に分散会Ⅰ、途中で懇親会を挟み、その後21時まで分散会Ⅱを実施しました。また、9月1日は、午前中に7題の自由研究発表、昼食を挟む形で分散会Ⅲ、その後分散会報告集会を開催し、作成したルーブリックの報告を行いました。

企画と事前準備及び大会に関わった立場から本大会を振り返り、大会運営の報告をさせていただきます。

II. 大会企画および事前準備について

本大会の企画において新たな試みが3点ありました。

第1点目は、基調講演やシンポジウムを取り入れず、大会参加者全員で科目のルーブリックを創るという分散会をメインプログラムにしたことです。分散会は2日間で計6時間を超えるものになりました。さらに当日だけでなく、参加頂く先生方には事前準備をお願いしました。まず、コーディネーターの先生方には事前にルーブリックの内容とどのように分散会を進めて頂くかについてメール等でご相談をさせていただきました。さらに、参加者には、大会直前となりましたが各科目の教科書や資料の持参をお願いし、授業展開に際しての課題等についても検討して参加頂くことを依頼しました。

第2点目は、宿泊形式で行ったことです。大人数ではない本学会の特徴を活かし、人との関わりや研究の関わりを深めて頂くこと、ルーブリック作成の課題に取り組むにあたって夜もディスカッションをして頂ける環境を創ることを目的と致しました。会場が企業の研修センターという性質上、門限等もあり、いわゆる「缶詰状態」となりました。

大会事務局としては、研修センターと交渉や打ち合わせをする中で、多くの民間企業がどのような研修を実施しているのか、改めて新人教育やキャリアアップ・スキルアップという人材育成に力を入れている社会の現状を知ることになりました。

第3点目は、自由研究発表に大会賞を授与することになったことです。研究担当理事の先生方を中心に出して頂いたアイデアを実施することになりました。多くの発表をして頂けるように促す目的もありました。

これらの新しい試みは、企画の初段階で出たものではなく、理事会でご相談をして実現したものです。大会事務局としては、宿泊形式になる分の事務量と当日の役割が増えること、当日参加はして頂きにくいこと、分散会の運営の仕方や成果等について7分散会の意思統一や整合性が取れるのか、取るためにはどのようにするのか等の多くの課題を背負うことになりました。社会福祉士養成課程の今後の見直し時期を捉えながら、どのような福祉専門職養成を行うか、あるいは広く本質を問う福祉教育のあり方等、本学会の抱える課題と社会的使命は大きいと認識しています。そのことを意識した企画となったのですが、大会運営に当たり、上記の課題をクリアするためには分散会コーディネーターを始めとする全ての参加者のご協力が必要なことばかりでした。そのほとんどがメールでの依頼と打ち合わせでの準備となったことが反省すべきことです。全ては理事会と参加者に助けて頂いた準備と運営となりました。

III. 大会当日の運営と今後の課題

大会当日の運営は、制約のある会場やタイトなプログラムの中で、全ての参加者が「お客様」ではなく、自らのこととして大会に参加とご協力を頂き、大会事務局を助けて頂きました。また、何よりも良かったことは、ルーブリック作成の課題に取り組むために1日目の分散会後も夜中まで議論を重ねられる方々や、2日目午前の自由研究発表も大会賞の投票のこともあり、ほとんど全員が9時から参加して下さる中、皆様が体調を崩されることなく、最後まで参加頂けたことです。さらに、昨年度の大会が「教育評価を行う出発点となった」ことを受け、実際に分散会を通じてルーブリック作成の試みを始めることができ、学会として何らかの成果を出していこうというアクションが始まったことも良かった点と言えるのではないのでしょうか。

一方、懸念していた通り当日参加が全くおられなかったこと、さらに参加申し込みの伸び悩みにより大会運営費について苦労しました。学会補助金に助けて頂き、また企画段階から状況を見越した予算運営ではありましたが、皆様にはご心配もかけたと思います。今回は宿泊も兼ねて外部の施設をお借りしたため、会場探しから交渉に至る前段階と当日の制約とのせめぎ合いで、参加者の皆様にはご不便をお掛けすることになりました。

大会事務局と手伝い学生に暖かい手を差し伸べてくださったことに心より感謝申し上げます。蛇足ですが、手伝い学生は先生方のお姿を覗いて異口同音に「本物は凄いな」と申しておりました。彼女たちにとって大切な時間になったことを嬉しく思います。

来年度は鹿児島国際大学が大会をお引き受け頂きました。本大会では一つのアクションが始まったばかりです。引き続き、皆様の熱い議論が続く大会となることを願っております。

大会参加者の声

第9回大会に参加して

西川友理（大阪国際福祉専門学校）

「ルーブリック」について、ほんの少し予習はしていたものの、明確には理解していない、でも大好きな授業について、じっくりと深く考えられそうだ、といった興味から参加を決めた今回の学会。期待以上に「濃い」経験をさせていただいた。

まずは、「統計感覚を身につけるためのワークショップ」に参加。開始前、参加者の多くは私も含め、「今まで何となく数字から逃げてきたのよね」という者同士、それぞれ少しだけ恥ずかしそうな表情をしていたが、杉山先生と山下先生の話は大変興味深く、時間が経つにつれ、参加者の意気が高まるのを感じた。統計とどう付き合うべきか、根本的な向き合い方を教えていただいたと思う。

引き続き、開会式がスタート。開会の挨拶や問題提起のアメリカのルーブリックの紹介の中では、「評価のあり方を変えると、授業内容や授業のあり方が変わる」「インプットとアウトプットだけではなく、知識を生活の体験の中でどう生かしているかという、アウトカムが大切」というお話が印象的であった。特に評価のあり方の重要性は認識していたつもりだったが、改めて上記のようにシンプルに表現されると、客観的で使いやすく、また授業が組み立てやすい評価方法を考えねば、と認識させられた。これにより、さらにルーブリックというシステムの有効性や可能性が感じられた。

色々と刺激された状態で、いよいよ分散会。いや、分散会という名の作業部会といった様相で、これがなかなかの濃さ。私はとにかく皆さんについていくのがやっとという状況であったが、今思い返してみれば、一人ひとりがじっくり考え、議論し、しっかりと盛り上がっていたと思う。ここまで参加型な学会は珍しい。同じ分散会にいらっしゃったある先生が、1日目の議論が終わった夜10時近く、「あー…脳みそが痺れてる…」とぼそっとおっしゃった一言が、何よりも皆の状況を表していた。

2日目、自由研究発表を経て、分散会報告集会。多くの分散会で、「とにかく広く大きく、どこから手をつけて、何を到達とすればいいかわからないが、暫定的にでもやってみよう」と頑張ってみたい」という発言が聞かれたように思う。また、「他の科目との繋がりを考えると…」という言葉も多かった。これらを踏まえると、ルーブリック作成には、各科目が有機的につながっていることをあらためて再認識し、全体像を認識・意識する事をどこかの段階で行う事が必要なのかもしれない。分散会報告集会は、そういった今後に向けてのヒントがいくつも見えてくるようで、非常に興味深かった。

…ところで、川廷会長が閉会式でおっしゃっていたとおり、「従来にあまりない形での学会」であるにも関わらず、私たち参加者が「脳みそが痺れる」くらいにのめりこむことができたのは、なによりスタッフの皆様のご尽力のおかげである。スタッフの皆様、本当にありがとうございました。

3. 日本社会福祉教育学会 2013年度 理事会報告

2013年度 第2回理事会（書面理事会）議事録

◇日時 2013年7月5日（水）～7月13日（土）（書類送付から返送締切まで）

◇方法 事務局より各理事に入会審査に関する必要書類を送付し、各理事より上記日程期間中に必要事項を記入の上、事務局に返送された。

1.入会審査 下記、入会申込者7名の入会が承認された。（入会申し込み順）

NO	氏名	所属
1	中村 裕子 氏	北海道医療大学 修士課程
2	山田 克宏 氏	社会福祉法人 佳成会
3	尾口 昌康 氏	別府大学
4	廣井 雄一 氏	國學院大學
5	上山崎 悦代 氏	日本福祉大学
6	小林 哲也 氏	大妻女子大学
7	恒吉 和則 氏	聖カタリナ大学

2013年度 第3回理事会議事録

◇日時 2013年8月30日(金) 17:00～21:30

◇場所 丸紅多摩研修センター研修所

◇出席者 理事：川廷宗之、杉山克己、川上富雄、小山隆、志水幸、保正友子、宮嶋淳、横山豊治

監事：岡本民夫

大会事務局：藏野ともみ、佐々木幸

事務局：鳶末憲子、原田聖子、福馬健一、三輪千加映

◇欠席者 理事：高橋信行、長崎和則

監事：福山和女

事務局：小嶋章吾

*以上、敬称省略

1.第9回大会について

第9回大会準備状況の報告と意見交換がなされた。

2.総会議案等について

総会資料に関する確認を行った。

3.春季研究集会について

(1) 第4回春季研究集会

1)日時：2014年2月23日(日) 10:30～16:00

2)会場：大妻女子大学

3)テーマ：「開発教育の成果をソーシャルワーク教育にどう活かすか
～ ソーシャルワークの定義改訂を踏まえて ～」

4)講師：田中治彦氏(上智大学 総合人間科学部 教育学科 教授)

5)シンポジスト：現在、調整中

(2) 第5回春季研究集会

1)開催予定日：2015年2月22日(日)

4.学会誌について

学会誌バックナンバーについて、希望する会員には無料配布をする。非会員に対しては、1冊500円で販売することとする。

5.入会審査の方法変更

2か月に1回程度、理事会(書面理事会を含む)を開催し、承認審査を早めることとする。

6.福祉系学会連合の監事担当について

川上理事から保正理事に交代したい旨を連合に伝えることとなった。

7.学会規約の改定について

今後の検討課題とする。

8.入会審査・退会報告

(1)入会承認

下記、入会申込者4名の入会が承認された。(入会申し込み順)

NO	氏名	所属
1	小川 知晶 氏	—
2	丹野 眞紀子 氏	大妻女子大学
3	早川 明 氏	秋田看護福祉大学
4	永嶋 昌樹 氏	聖徳大学

(2)退会報告

下記、退会届出者2名の退会が確認された。(退会届出順)

NO	氏名
1	宮嶋 敏 氏
2	川池 智子 氏

9. 名誉会員の推挙

太田義弘会員について、川廷会長の発議、参加理事全員の一致により、名誉会員に推挙することとなった。

* 推挙根拠としては、「日本社会福祉教育学会 名誉会員推挙規程 1. 名誉会員推挙基準」の「1」、「2」、「3- (c), (d)」に該当するものと判断した。

2013年度 大会後理事会議事録(第3回理事会・追加)

◇日時：2013年9月1日(日) 15:20～15:50

◇場所：丸紅多摩センター研修所

◇出席者：理事：川廷宗之、杉山克己、小山 隆、志水 幸、高橋信行、長崎和則、保正友子、
宮嶋 淳、横山豊治

監事：岡本民夫

事務局：原田聖子、福馬健一

*以上、敬称省略

1. 第10回大会について

(1)開催予定日

1)大会開催予定日：2014年8月23日(土)・24日(日)

2)大会予定会場：鹿児島県霧島市 霧島ロイヤルホテル

(2)大会の形式について

第9回大会同様、会員参加型の形式で行うことが確認された。

2. 『INTRODUCTION TO RUBURICS』の翻訳について

当学会から『INTRODUCTION TO RUBURICS』の翻訳を出す方向で調整をしていくこととなった。

3. 第9回大会成果物(分散会ループリック)の取り扱いについて

第10号学会誌に、本大会の研究成果を仮確定版として掲載し、パブリックコメントを募ることとなった。

4. 投稿論文の査読について

投稿論文の査読について、指導的視点でのコメントや着眼点を評価する視点を取り入れることが望ましいとの意見があった。

4. 日本社会福祉教育学会 2013年度 総会報告(決議書)

日時 2013年8月31日(土) 13:30～14:30

会場 丸紅多摩センター研修所

会長挨拶

議長選出 山下匡将会員(名古屋学院大学)、杉野聖子会員(江戸川大学総合福祉専門学校)

出席会員数 33人

【執行部出席者】

会長：川廷宗之 副会長：杉山克己

理事：小山 隆、志水 幸、高橋信行、長崎和則、保正友子、宮嶋 淳、横山豊治

監事：岡本民夫

事務局：嵩末憲子(2012年度事務局)、原田聖子、福馬健一(以上、2013年度事務局)

I 議事

第1号議案から第6号議案まですべて承認された。

第1号議案 2012年度事業報告(案)

第2号議案 2012年度決算報告(案)および監査報告

第3号議案 2013年度補正事業計画(案)

第4号議案 2013年度補正予算(案)

第5号議案 2014年度事業計画(案)

第6号議案 2014年度予算(案)

各議案の内容は下表のとおり。

II 学会指定研究報告

- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 1. 「3. ソーシャルワーク教育の国際比較研究」 | … 保正理事より進捗状況の説明を行った。 |
| 2. 「4. 歴史研究」 | … 横山理事より進捗状況の説明を行った。 |
| 3. 「5. 教育評価研究」 | … 宮嶋理事より進捗状況の説明を行った。 |

		第1号議案 2012年度 事業実施報告	第3号議案 2013年度 補正事業計画	第5号議案 2014年度 事業計画
1. 理事会・事務局関係	1-1. 総会	日時：2012年8月25日(土) 17:00～18:00 会場：立正大学大崎校舎 511教室 出席会員数：28人 議決項目：2011年度の事業報告、決算報告、監査報告/2012年度の補正活動計画、予算/2013年度の事業計画、予算	日時：2013年8月31日(土) 13:30～14:30 会場：丸紅多摩センター研修所 議決項目：2012年度の事業報告、決算報告、監査報告/2013年度の補正活動計画、予算/2014年度の事業計画、予算	大会開催期間中に実施
	1-2. 理事会	第1回 2012年5月20日(日) 於.大妻女子大学千代田校舎 第8回大会準備検討ほか 第2回 2012年8月24日(金) 於.大妻女子大学千代田校舎 総会議案ほか 第3回 2013年2月23日(土) 於.大妻女子大学千代田校舎 第8回大会準備報告ほか *その他「理事協議会」を2012年11月11日(日)に実施 於.東北福祉大学	第1回 2013年4月14日(日) 於.大妻女子大学千代田校舎 第9回大会準備検討ほか 第2回 2013年7月5日(金) 書面理事会・入会審査 第3回 2013年8月30日(金) 於.丸紅多摩センター研修所 第9回大会準備報告ほか 第4回 2014年2月22日(土) 於.大妻女子大学千代田校舎 *その他「理事協議会」を2013年11月3日(日)に実施予定	対面理事会: 8月、2月の計2回 *その他、書面等理事会 および理事協議会等を 適宜おこなう。
	1-3. 会員状況	会員数 207名 新入会員 5名/退会者数 13名 (2013年3月31日時点)	会員数 219名 新入会員 14名/退会者数 5名 (2013年8月30日時点)	会員数の拡大を目指す。
	1-4. 理事選挙			2014年5月頃、理事選出の選挙をおこなう。
2. 研究関連	2-1. 大会	第8回大会 日時：2012年8月25日(土)・26日(日) 会場：立正大学 大崎校舎 内容：【ワークショップ1】「実習教授法について」川上富雄(駒澤大学) 【ワークショップ2】「演習教授法について」杉野聖子(江戸川大学総合福祉専門学校)【記念講演】「社会福祉士養成課程改正についての指定科目外担当からの評価」加藤博史(龍谷大学) 【基調講演】「社会福祉士養成課程改正の経緯と現状」白澤政和(桜美林大学大学院)	第9回大会 日時：2013年8月31日(土)・9月1日(日) 会場：丸紅多摩センター研修所 内容：【ワークショップ1】「講義科目を学生参加型で運営するには～ITを使わずに、授業準備をあまり行わずに～」川廷宗之(大妻女子大学)【ワークショップ2】「統計感覚を身につけるためのワークショップ」杉山克己(青森県立保健大学) 山下 匡将(名古屋学院大学)	第10回大会 日時：2014年夏 会場：霧島ロイヤルホテル(鹿児島霧島市) 内容：検討中 <div style="border: 2px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px; text-align: center;"> <p>☆お知らせ☆</p> <p>総会后、2014年度大会の日程を次の予定とすることが決まりました。</p> <p>2014年8月23日(土) 24日(日)</p> </div>

	<p>【シンポジウム】「社会福祉士養成課程の改正について検証する(1)ー完成年次を迎えてどのように評価するのかー」 コーディネーター：小山隆（同志社大学） シンポジスト：高齢者福祉論の立場から 渡辺裕一（武蔵野大学） 障害者福祉論の立場から 綿 祐二（文京学院大学） 実習・演習教育の立場から 守本友美（皇學館大学）</p> <p>【自由研究発表】 11 題 【ランプセッション】 （社福士養成課程カリキュラム改正に関する会員アンケート報告）</p>	<p>【問題提起】「ルーブリックを活用した教育課程開発の試み」川 廷宗之(大妻女子大学)</p> <p>【分散会・分散会報告集会】</p> <table border="1" data-bbox="790 309 1460 622"> <thead> <tr> <th colspan="2">分散会</th> <th>コーディネーター</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>現代社会と福祉</td> <td>志水・横山</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>社会調査の基礎</td> <td>高橋・杉山</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度</td> <td>宮嶋</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>精神保健に関する制度とサービス</td> <td>長崎</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>相談援助の基盤と専門職</td> <td>小山・保正</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>地域福祉の理論と方法</td> <td>川廷</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>介護の基本</td> <td>渡邊・寫末</td> </tr> </tbody> </table> <p>【自由研究発表】 社会福祉教育実践研究 4 題 社会福祉教育理論研究 3 題</p>	分散会		コーディネーター	1	現代社会と福祉	志水・横山	2	社会調査の基礎	高橋・杉山	3	児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度	宮嶋	4	精神保健に関する制度とサービス	長崎	5	相談援助の基盤と専門職	小山・保正	6	地域福祉の理論と方法	川廷	7	介護の基本	渡邊・寫末										
分散会		コーディネーター																																		
1	現代社会と福祉	志水・横山																																		
2	社会調査の基礎	高橋・杉山																																		
3	児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度	宮嶋																																		
4	精神保健に関する制度とサービス	長崎																																		
5	相談援助の基盤と専門職	小山・保正																																		
6	地域福祉の理論と方法	川廷																																		
7	介護の基本	渡邊・寫末																																		
<p>2-2. 春季研究集会</p>	<p>日時：2013年2月24日（日） 10：30～16：00 会場：大妻女子大学 千代田校舎 主催：日本社会福祉教育学会／日本社会福祉士養成校協会 関東甲信越ブロック／日本社会福祉教育学校連盟 関東甲信越ブロック テーマ：社会福祉教育研究におけるルーブリック評価の活用</p> <p>【第Ⅰ部】教育講演「社会福祉教育研究とルーブリック評価 - コア・カリキュラムとルーブリック評価との関連を踏まえて -」 濱名篤(関西国際大学 学長)</p> <p>【第Ⅱ部】実践報告「社会福祉専門教育におけるルーブリック評価活用の実際」 コーディネーター 志水幸／報告者 川廷宗之、小林哲也、佐々木幸、杉野聖子、原田聖子／コメンテーター 杉山克己 参加者：42名</p>	<p>日時：2014年2月23日（日） 10：30～16：00 会場：大妻女子大学 千代田校舎 テーマ：ソーシャルワークの定義と開発教育の視座（仮題）</p> <p>【教育講演（予定）】：ソーシャルワーク教育における開発教育の意義（仮題）</p> <p>【講師（予定）】 田中治彦（上智大学 総合人間科学部 教育学科 教授）</p>	<p>開催予定日：2015年2月22日(日) 会場：未定 テーマ・内容：検討中</p>																																	
<p>2-3. 課題研究</p>	<p>(1)学会指定研究 … 詳細は別添資料ご参照</p> <table border="1" data-bbox="338 1624 1460 1859"> <thead> <tr> <th>No.</th> <th>テーマ</th> <th>担当理事</th> <th>研究期間（予定）</th> <th>備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>2</td> <td>職業人養成教育</td> <td>高橋</td> <td>2010～2012年度</td> <td></td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>国際比較研究</td> <td>小山、保正</td> <td>2011～2013年度</td> <td></td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>歴史研究</td> <td>川上、志水、横山</td> <td>2012～2014年度</td> <td></td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>教育評価</td> <td>宮嶋、杉山</td> <td>2013～2015年度</td> <td>NLN₁₃にて呼びかけ</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>ITを活用した教育</td> <td>長崎、川廷</td> <td>2014～2016年度</td> <td>2013年度よりテーマ変更予定</td> </tr> </tbody> </table> <p>*テーマ1は2011年度に終了。</p> <p>(2)会員自主企画研究</p> <table border="1" data-bbox="470 1937 1492 2002"> <tr> <td>実績なし</td> <td>実績なし</td> <td>前年度(2013年度)中の募集を検討</td> </tr> </table>			No.	テーマ	担当理事	研究期間（予定）	備考	2	職業人養成教育	高橋	2010～2012年度		3	国際比較研究	小山、保正	2011～2013年度		4	歴史研究	川上、志水、横山	2012～2014年度		5	教育評価	宮嶋、杉山	2013～2015年度	NLN ₁₃ にて呼びかけ	6	ITを活用した教育	長崎、川廷	2014～2016年度	2013年度よりテーマ変更予定	実績なし	実績なし	前年度(2013年度)中の募集を検討
No.	テーマ	担当理事	研究期間（予定）	備考																																
2	職業人養成教育	高橋	2010～2012年度																																	
3	国際比較研究	小山、保正	2011～2013年度																																	
4	歴史研究	川上、志水、横山	2012～2014年度																																	
5	教育評価	宮嶋、杉山	2013～2015年度	NLN ₁₃ にて呼びかけ																																
6	ITを活用した教育	長崎、川廷	2014～2016年度	2013年度よりテーマ変更予定																																
実績なし	実績なし	前年度(2013年度)中の募集を検討																																		

2-4. 特別 研究 プロ ジェ クト	… 詳細は別添資料ご参照		
3. 学 会 誌	<p>第6号:2012年3月31日発行(経理上は2013年度執行) 150頁 第1回春季研究集会報告第7回大会報告 調査研究 学会員調査報告 他</p> <p>第7号:2013年1月15日発行 138頁 第2回春季研究集会報告、学会宿題研究報告1:初年時教育 他</p> <p>第8号:2013年3月29日発行 71頁 第8回大会報告、論文、実践報告 他</p>	<p>第9号:2013年 月発行予定 第3回春季研究集会報告論文、実践報告 他</p> <p>第10号:2014年2月発行予定 第9回大会報告、論文、実践報告 他</p> <p>*学会誌のHPへのアップ準備中</p>	<p>第11号:2014年9月発行予定 第4回春季研究集会報告 学会指定研究報告3:国際比較研究、論文、実践報告 他</p> <p>第12号:2015年2月発行予定 第10回大会報告 論文 実践報告 他</p>
4. ニ ュ ー ズ レ タ ー	<p>4月 NL第13号発行 巻頭言:杉山副会長、第2回春季研究集会報告、第4回理事会報告 学会探訪②日本保健医療福祉連携教育学会、投稿:私の福祉教育</p> <p>7月 NL第14号発行 巻頭言:長崎理事、第8回大会案内(第3報)、第1回理事会報告、学会探訪③日本生殖医学会、投稿:私の福祉教育</p> <p>10月 NL第15号発行 巻頭言:川上理事、第8回大会報告、第2回理事会報告、学会探訪④日本福祉のまちづくり学会、投稿:私の福祉教育</p> <p>1月 NL第16号発行 巻頭言:志水理事、第3回春季研究集会案内、第9回大会予告、学会探訪⑤人間福祉学会、投稿:私の福祉教育</p>	<p>4月 NL第17号発行 巻頭言:岡本監事、第3回春季研究集会報告、第9回大会予告、学会探訪⑥日本福祉図書文献学会、投稿:私の福祉教育</p> <p>7月 NL第18号発行 巻頭言:保正理事、第1回理事会報告、学会探訪⑦日本教育医学会、この一冊、私が推薦します、投稿:私の福祉教育</p> <p>*メールマガジンの開始</p> <p><今後の発行予定></p> <p>10月 NL第19号 巻頭言:福山監事、第9回大会報告、理事会・総会報告、学会探訪⑧、投稿、事務連絡</p> <p>1月 NL第20号 巻頭言:横山理事、理事会・総会報告、学会探訪⑨、投稿、事務連絡</p>	<p>4月 NL第21号 7月 NL第22号 10月 NL第23号 1月 NL第24号</p> <p>*引き続き、年4回発行予定。 会員からの投稿、情報提供、随時募集する。</p> <p><課題> 紙媒体の広報活動とネットによる情報提供との、会員ニーズに即した使い分けを明確にしていく。</p>
5. 渉 外 関 連	川上理事が、日本社会福祉系学会連合会・総会(5月26日)にて監事への就任を要請された。		

		第2号議案	第4号議案	第6号議案	備考
		2012年度	2013年度	2014年度	
		決算	(補正)予算	予算	
収入の部	a 会費	2,139,000	1,708,000	1,606,000	年会費8,000円／入会費3,000円
	b 研究集会・参加費	38,000	50,000	50,000	参加費1,000円
	c 共催費	370,000	100,000	50,000	社養協・学校連盟関ブロより
	d 雑収入	45,127	10,000	10,000	利息等
	e 前年度繰越	450,354	886,132	350,000	
	収入合計		3,042,481	2,754,132	2,066,000
支出の部	A 大会助成費	336,518	400,000	300,000	毎年夏季に実施
	B 研究集会	409,102	150,000	100,000	毎年春季に実施
	C 学会誌発行費	541,172	400,000	300,000	発行予定2回
	D 課題研究費	100,420	300,000	300,000	
	K 特別研究費	200,420	150,000	150,000	
	E 理事会費	261,114	400,000	250,000	対面理事会のほか書面等理事会、理事協議会をおこなう
	F 事務費	255,983	200,000	200,000	
	M NL等発行費	0	180,000	180,000	「NL等発行費」は、2013年度補正予算より創設／NL発行は年4回予定。学会誌、大会・春季集会の案内等の送料・発送作業料を含む。
	G HP・PR費	21,200	50,000	50,000	
	H 選挙費	0	0	50,000	
	I 渉外費	30,420	20,000	20,000	
	J 予備費	0	504,132	166,000	
	L 年度繰越	886,132	0	0	「年度繰越」金は、2013年度補正予算より予備費に含むこととした。
支出合計		3,042,481	2,754,132	2,066,000	

学会指定研究

2. 「職業人養成としての福祉教育の課題」

研究担当理事：高橋 信行

	事業報告／事業計画(案)
2012年度 事業報告	2011年 第1回春季研究集会 において研究メンバーの応募、2011年度 学会シンポジウムのおいての報告を受けて、研究フォーマットのもとで、2012年は研究をすすめる旨を確認。この時点でおおむね、薦末憲子 氏、柿本誠氏、高橋信行の3名で研究をすすめる。
2013年度 補正事業計画 (案)	2013年度中に、宿題研究特集として学会誌に掲載予定 宿題研究2「職業人養成としての福祉教育の課題」 1. これまでの経緯 (高橋) 2. 職業人養成教育について (柿本誠) 3. ソーシャルワーカー養成教育におけるIPE～職業教育として最終学年にIPEを導入する意義～小嶋章吾・薦末憲子 4. 福祉学生の進路選択と就職一専門職にとっての養成教育 (高橋信行)

3. 「ソーシャルワーク教育の国際比較研究」

研究担当理事：小山 隆、保正 友子

	事業報告／事業計画(案)
2012年度 事業報告	数回の研究会を開催し、各自の問題意識について意見交換を行う。
2013年度 補正事業計画 (案)	福祉教育学会誌に掲載するための論文の構想を練り、執筆分担を行い、各自が執筆に取り組む。

4. 「歴史研究」

研究担当理事：川上富雄、志水幸、横山豊治

	事業報告／事業計画(案)
2012年度 事業報告	本学会第8回大会で次について報告をおこなった。 「大正期に始まる社会事業教育の変遷 -東洋大学の社会福祉教育史に関する第一報-」(報告者：横山豊治)
2013年度 補正事業計画 (案)	本学会第9回大会で次について報告をおこなう予定である。 「戦後の社会福祉教育の変遷 -東洋大学の社会福祉教育史に関する第二報-」(報告者：横山豊治)

5. 「教育評価研究」

研究担当理事：宮嶋淳、杉山克己

	事業報告／事業計画(案)
2013年度 補正事業計画 (案)	本学会「特別研究プロジェクト」において、社会福祉教育における評価方法としての「ルーブリック」研究がとりあげられている。このことと関連して、本年度の当該研究は他領域の教育評価の方法のレビュー、あるいは海外のソーシャルワーク教育の調査を、担当理事並びに研究参加意向を示された会員により、分担研究を行うこととする。
2014年度 事業計画	① 前年度の分担研究の成果をもちより、学術的ミーティングを行う。 ② ①の議論を踏まえて、当該年度の研究方針・計画・進捗管理を構築する。 ③ 当該年度の分担研究の成果をもちより、次年度の研究目標を明確化する。
2014年度 事業計画	指定研究のタスクゴール年度として、何らかの成果を公表する。

	事業報告／事業計画(案)
2012年度 事業報告	<p>①目的・・・詰め込み教育に陥りがちな大学等における専門職教育を見直し、「実践場面での援助行動を行える」力量を持つように養成教育を行っていくための方法や、その評価方法としてルーブリックを参考にしつつあたらしい技法に取り組んでいくこと。 また、実践力を重視する方向で、社会福祉士養成教育に関する教育計画をルーブリックの方法を使って検討し、今後の改善に向けて問題提起をしていく準備を進める。</p> <p>②当面の目標・・・ルーブリックという方法に関する学習を深める。社会福祉士養成に関する各科目内容の検討を進める組織化の準備を進める。関連資料の整備を図る。</p> <p>③課題・・・組織的に研究を進める体制になっていないため、その準備から行う必要があり、相当の手間暇がかかる。</p> <p>④実現のための取り組み方法・・・学会としての共同研究を進める基礎的システム（名簿の整備・ネットでの情報交換システムの整備）</p> <p>⑤実施状況の判定基準・・・ネットでの情報交換システムや、ルーブリックに関する資料の整理、試行段階での報告が行えれば良い。</p> <p>⑥実績・・・春の研究集会のメイン報告として、ルーブリックに関する研究を行った。</p> <p>⑦今後の行動計画・・・13年度事業計画参照</p>
2013年度 補正事業計画	<p>①目的・・・詰め込み教育に陥りがちな大学等における専門職教育を見直し、「実践場面での援助行動を行える」力量を持つように養成教育を行っていくためのルーブリックを有志会員が自力で開発できるようになること。 その力量を活用しつつ、実践力を重視する方向で、社会福祉士養成教育に関する教育計画をルーブリックを使って検討し、幾つかの科目について、科目ルーブリック試案をまとめ、今後の改善に向けて問題提起をしていく。</p> <p>②当面の目標・・・いくつかの科目に関して、当該科目内容に関する研究グループを作り、大会等で協議を行うと共に、年度末までに社会福祉士養成教育科目全部に関して、それぞれの研究グループを創る。</p> <p>③課題・・・それぞれの研究グループが、科目ルーブリック試案を提示する段階まで進むこと。目標として、2／3程度の科目で、草案段階の資料がまとまる段階まで進行出来ることが目標。</p> <p>④実現のための取り組み方法・・・まずは会員内で各科目ごとの研究グループを組織する事。会員内で当該科目の検討メンバーが6人以上集まらない場合は、会員外の多授業担当者に下院になっていただいてこのプログラムになっていただくように働きかける。（ゲスト会員制度も検討する） 当該科目内容を中心に据えている学会や研究会との連携を深める。</p> <p>⑤実施状況の判定基準・・・④の内容の進行状況で判定し、2014年度の活動内容に反映する</p> <p>⑥実績・・・会員への呼びかけを行って担当科目調査を進めている。7月6日に担当理事を中心にルーブリックに関する学習会を行った。</p> <p>⑦行動計画・・・理事を中心にしつつも、結構大変な作業なので、全会員の中から共同で取りまとめて行けるような組織作りを急ぐ。</p>
2014年度 事業計画	<p>①目的・・・詰め込み教育に陥りがちな大学等における専門職教育を見直し、「実践場面での援助行動を行える」力量を持つように養成教育を行っていくためのルーブリックを出来るだけ多くの会員が自力で開発できるようになること。 その力量を活用しつつ、実践力を重視する方向で、社会福祉士養成教育に関する教育計画を、ルーブリックを使って検討し、全ての科目について、科目ルーブリック試案をまとめるとともに、これらのルーブリックを踏まえて、今後の社会福祉士養成教育に関する課題を取りまとめる。</p> <p>②目標・・・科目ごとの研究グループで研究を一層進められるような組織的基盤を整備する。</p> <p>③課題・・・研究を進めるための財政基盤を整える必要がある。</p> <p>④実現のための取り組み方法・・・会員内で各科目ごとの研究グループを組織する事。当該科目内容を中心に据えている学会や研究会との連携を深め、日常的な情報交換ができるように体制を整える。</p> <p>⑤実施状況の判定基準・・・④の内容の進行状況で判定する。</p> <p>⑥行動計画・・・様々な会員間で相互作用が生まれるように、支援活動を行う。</p>

5. 学会探訪⑧：日本マイクロカウンセリング学会

保正友子(立正大学)

1. 日本マイクロカウンセリング学会の概要

ソーシャルワーカー養成校における相談援助演習では、必ず面接技法の習得がプログラムに含まれている。そこで行われる多くのトレーニングは、マイクロカウンセリングに基づいたものと思われる。

そもそもマイクロカウンセリングとは、アメリカで Allen.E.Ivey 博士によって創始されたカウンセリングの基本モデルであり、コミュニケーションの形を一つ一つ技法として命名し、目に見える形で習得できるようにしたものである。

日本では、1970年代後半に Ivey 博士を訪問して教えを受けた福原真知子氏らにより、1985年に日本マイクロカウンセリング研究会が設立され、その後、日本におけるマイクロカウンセリングの定着を目指して研究会・研修会が実施されてきている。そして、2005年に日本マイクロカウンセリング学会に改名し、学会としてのスタートを切った。この学会には、心理、教育、福祉、医療、看護、産業、司法等に携わる人が入会しており、学際的なマイクロカウンセリングの活用を追求しているところに特徴がある。

現在、学会では年次総会・大会を含めて、研修会と研究会を年2回ずつ開催している他、学術誌『マイクロカウンセリング研究』を年1回、ニュースレターは年2回発行している。また、提携団体であるアメリカの Microtraining Associates を中心とする国外のカウンセリングや、心理療法関係の団体や個人との交流も行っている。

2. 研修会に参加して

マイクロカウンセリング研究会の時から入会していた筆者は、1, 2年に1度は研修会に参加している。ここでは、マイクロカウンセリングの個々の技法について、ワークショップ形式での研修が行われている。

2013年3月に開催された第5回学術研究集会「『傾聴とは』-マイクロカウンセリングのさらなる理解に向けて」のプログラムは以下のとおりである。(日本マイクロカウンセリング学会ホームページより↓)

<http://www.microcounseling.com/fifth.html>

第5回学術研究集会(2013年3月)プログラム

午前	研究発表1 マイクロカウンセリング技法の習得困難度に及ぼす要因についての検討 近藤純子(千里金蘭大学看護学部)	10:00~12:00
	研究発表2 マイクロ技法トレーニング経験者の技法に対する認識と活用の実態 影山セツ子(常葉学園本部 学部新設参与)	
	研究発表3 会話場面における脳活動の検討-開かれた質問/閉ざされた質問- 神野志穂(日本女子大学人間社会学部),金沢創(日本女子大学准教授),福原真知子(常磐大学心理臨床センター顧問),山口真美(中央大学文学部教授)	
午後	挨拶 会長 福原真知子	13:10~13:20
	鼎談 公益社団法人 日本心理学会国際賞・功労賞受賞記念 「福原真知子先生と日本におけるマイクロカウンセリングの歩み」 福原真知子(常磐大学心理臨床センター顧問), 井上孝代(明治学院大学教授), 野口京子(文化学園大学教授) 司会 玉瀬耕治(帝塚山大学教授)	13:20~14:50
	シンポジウム 「傾聴とは」-異なる分野における対人援助の在り方としての傾聴の意味- 話題提供 学校教育における傾聴 麓 泰介(横浜市立新井小学校校長) 医療サービスにおける傾聴 浅妻直樹(河北総合病院内科部長) 小児看護における傾聴 永島すみえ(明治国際医療大学教授) カウンセラー養成における傾聴 福島脩美(目白大学名誉教授) マイクロカウンセリング訓練における傾聴 玉瀬耕治(帝塚山大学教授) 司会 藤田主一(日本体育大学教授)	15:00~17:50
	懇親会 兼 福原真知子先生出版記念祝賀会	
		18:00~20:00

研修会に参加する毎に感じるのは、日頃、学生や社会人に対して面接技法を教える立場にあるが、講師の話の聴いて実際に面接技法を活用する経験をしてみると、再度原則的な部分での気付きや確認ができることである。そのため、自分自身のメンテナンスの場として学会を活用させてもらっている。

決して派手ではなく地道な活動を積み重ねている学会ではあるが、今後も、マイクロカウンセリングのスピリッツと技法は、学会活動を通して脈々と受け継がれていくことであろう。

6. 会員の声～私の福祉教育～

大学生時代の体験と学びが私の社会福祉教育の原点

小林明子（福井県立大学）

筆者は、“私は、常に、ソーシャルワーカーであること”を自覚し、これまでの人生で直面してきた様々な社会福祉の課題に対し、地域社会でソーシャルアクションを起こしてきた。

大学卒業後、障がい者福祉の分野で、海外でのボランティアを3年間行った。そして、不十分な現地の言葉を使い、問題解決のための組織づくりや資金集め、現地の障がい児・者たちの環境整備など、積極的に取り組んだ。帰国後は、現在住んでいる地域で、難病患者の患者会を組織し、支援を続けている。

また、障がい分野の国際協力を推進する為に、NPOを立ち上げ、JICAの委託を受け、東南アジアや中東の関係職員研修を実施している。

筆者が、社会福祉教育を行う際に、大切にしているのは、前述したような筆者自身のソーシャルワーカーとしての実践や生き様を学生たちに伝えることである。その時、私が、“どんなソーシャルアクションを起こしたのか”“なぜソーシャルワーカーがソーシャルアクションを起こす必要があったのか”、“その背景にはどんな社会福祉の問題があったのか”等である。そして、できれば、筆者が関わっている活動にも参加し、体験的に学んでほしいと考えている。

筆者がこのような思いを持つに至った原点は、筆者自身が体験・体感した大学生時代の学びにあると感じている。

筆者が、日本社会事業大学という学びの場で学生生活を送ったのは、かれこれ40年ほど前のことである。

当時の先生方のほとんどは、既に第一線を離れているが、今から思えば、私が学ばせて頂いた先生たちは、常に現場と教育を車の両輪にし、実践的な社会福祉教育を行っていた。

「社会保障論」を教えてくださいました小川政亮先生の指導で、先生の弁護団の答弁を聞きに裁判所に通い、堀木訴訟アppeールのデモ行進に参加したこともあった。

また、「医療福祉論」は、現場のワーカーのMSWの講義であった。いつも臨場感あふれるお話が満載で、先生の担当だった藤木訴訟の当事者、藤木イキさんの自宅を訪問する機会を作っていただき、ご本人からたくさんの思いをお聞きした。

大橋謙策先生のゼミでは、東北から東京に集団就職で出てきた中卒者のその後の生活の追跡調査を行うために区役所へ足を運び、対象者の移転先の住所を調べ、聞き取りを行った。そして、最後は彼らの出身地の青森や秋田まで追跡調査を行った。

一方、同じ大学で学んでいた仲間の学生たちの多くは、それぞれ、社会福祉に熱い思いを抱いていた。全盲の同級生のために、教科書の朗読グループを組織し、社事大学生が最も利用する原宿の竹下口に音声の出る信号機を設置するための署名活動を行い、信号機の設置をやり遂げた。

当事者や現場が見える位置に身を置き、そこから、社会福祉の問題やその解決方法を考える学生時代の学びと体験は、私のソーシャルワーカー像の形成と社会福祉教育の原点である。

さて、筆者は、最近の学生たちが、読んで書いて教室で学び、大学から出て現場の空気やにおいを体感・体験して学ぶことをあまりしなくなったのではないかと危惧している。果たしてこのような考えは、筆者の思い込みだろうか。

私の福祉教育

貴島日出見（鈴鹿医療科学大学）

社会福祉士養成の教育に携わるようになって10年目を迎えている。この間、入学者数は開設当初の定員の半分以下の状況が4～5年続いている。

開設して1年目、2年目は「できる学生」が多くを占めていたが、最近は「手のかかる学生」が目立つようになってきている。というのも入学者の半数以上がAO入試や指定校推薦で入学してきている状況だからである。要するに受験勉強をすることなく大学に入学してきた学生が多数いるわけである。また、一次志望が叶わず二次志望として福祉を選択したとか、高校の先生に勧められるまま何となくという学生も結構いる。

いずれにしても最終的には福祉でいいということで入学してきたわけだが、福祉を目指す学生には、家族や自分自身が医療や福祉の専門職から何らかの支援を受けた体験があり、今度は自分が支援する側になりたいという気持ちを持っている学生が多いように思う。学生の多くは福祉マインドの原石は持っているのだが、その原石を玉になるまで磨くにはかなりな時間がかかる。4年間で実践力を備えた社会福祉士として社会に送り出すことはなかなか大変なことである。

3年次の夏休み期間中に行う相談援助実習では、ソーシャルワーク実習段階として個別支援計画を立てることを実習の目標の一つにしているが、学生はアセスメントを行うのに四苦八苦している。福祉のことについてほとんど知らなかった、あるいは関心のなかった学生が、わずか2年半の間で実習先の利用者の生活歴や時代背景、家族関係、心の痛みや想いを把握できるようになるのだろうかと思ってしまう。

実習指導者が学生の立てた個別支援計画について十分なスーパービジョンをしてくれればまだいいが、そうでなければ実習の終盤に立てるモニタリングをしない個別支援計画にどれだけの意味があるのだろうか。

実務系教員の立場からは、社会人の先輩として、また社会福祉士の先輩として、後輩を育てるという気持ちで日々学生に接している。社会福祉士の国家試験対策では厳しく叱咤激励するため、学生には恨まれているのかもしれないが、卒業してから職能団体の活動の中で声をかけられれば教師冥利に尽きるというものである。

若者には厳しい就職状況が続いているが、30～40年働き続けられるような逞しさと、生きる力が育ってほしいと願っている。

これまで6年間の卒業生417名のうち、116名が卒業時に社会福祉士として巣立っていった。本来の相談業務に携わっていない者もまだ多いが、この間の経験がやがて利用者の思いに沿った支援計画を立てる肥やしになるはずである。

7. この一冊：私が推薦します！

大学生活の構造とその意義とは

乾彰夫 編『高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか 若者たちが今＜大人になる＞とは』
(大月書店、2013年) を読んで

田中秀和（国際こども・福祉カレッジ）

本学会に所属されている方々の多くは、社会福祉系大学や同系専修学校、または社会福祉士及び精神保健福祉士の一般養成施設等に勤務されていると推察する。

これらの場所で多くの時間を教員と共に過ごしているのが、本書に登場する青年らと同年代の学生たちである。

本書は、東京都の学力中位と下位に位置する高校の卒業生を対象とした追跡インタビューを元に、調査対象者が高校卒業後からその5年後までの移行過程を描いている良書である。

各章は上記の調査結果を元に様々なカテゴリーに分類して構成されている。それらは、若者のアイデンティティ形成に関わる職業的な教育・研修プログラム、若年女性と性的サービス労働、若者の移行とケアワーク、男性のジェンダー/セクシャリティ意識、ネットワークの形成・維持の基盤等に分類される。

筆者が最も関心を持ち、また本学会とも密に関連する章は、本書、第7章にあたる「若者は大学生活で何を得たのか？-大学生活の構造とその意義」である。ここでは、調査対象者のうち、高校卒業後に大学へ進学したものに焦点をあて、大学生活の内実を探っている。ソーシャルワーカーの養成教育やその成長過程に関心をもつ筆者にとって、この章は特に魅力あふれる内容である。

章内においては、高校卒業後、大学の福祉系学科に一般推薦で合格し、卒業後は精神保健福祉士として障害者支援施設に勤務する川本さん（仮名）も登場する。

川本さんは、大学で視野の広がる経験をしている。それは、自身の大学で開催された福祉系学会に参加したことにより学習意欲が高まり、課外活動に積極的に参加するようになり、さらには教員からの働きかけによりボランティア活動にも参加するようになっている。

これらの経験を著者（児島功和）は、「アイデンティティ資本の蓄積と形成」と整理している。

また、当該の章においては、大学生活における課外活動は単なる「遊び」＝無為な活動ではなく、それが当事者にとって「成長感覚」を伴った自信につながっていることを描いている。

学生が有意義な学生生活を送るためには、カリキュラムに定められた教育のみでなく、本書で紹介されているような課外活動や、ボランティア経験ができる環境を整えることも必要不可欠ではないか。そのために自身が貢献できることはないのかとの思いを濃くして、本書を読み終えた。

8. 社会福祉系学会連合より

社会福祉系学会連合より、加盟学会とその会員あてに協力要請とご案内がありましたのでお伝えします。

(1) 災害福祉アーカイブへの情報提供のおねがい

学会連合では、加盟学会・会員に広く情報提供を呼びかけ、学会連合 HP 内に災害福祉アーカイブを構築中です。貴会の機関誌に掲載された震災関連研究の論文をはじめ、貴会会員による単行本、報告書などの著者・編者名、タイトル、出版社、出版年、支援活動、実践活動を行う団体名・実践活動名、サイト名、サイトアドレスを、学会連合のメールアドレス (union_jssw@gakkai.ne.jp) にお送り下さい。

現在集約した情報は、http://www.gakkai.ne.jp/jaswas/saigai_archive/index.html から閲覧できます。

(2) 社会福祉系学会連合平成 25 年第 2 回シンポジウムのお知らせ

学会連合では、3 年間にわたり加盟学会の皆様と震災関連研究・活動の情報共有につとめるとともに、学会連合としても外部資金による独自の研究活動をすすめてまいりました。

このたび、3 年間の活動の総括を行い、今後の課題と展望を議論するため、以下のシンポジウムを開催いたします。

シンポジウムは、社会福祉学会が開催するフォーラムに引き続き、同じ会場で開催いたします。会員の皆様のふるってのご参加をお待ち申し上げます。

- 1 日時：平成 25 年 11 月 30 日（土） 15 時 40 分～17 時
- 2 会場：福島県郡山市開成 3 丁目 25 番 2 号 郡山女子大学 芸術館大教室
- 3 入場料：無料
- 4 テーマ「災害福祉研究における社会福祉系学会の役割～研究活動を通して～」
- 5 シンポジウム：
コーディネーター 副田あけみ(日本社会福祉系学会連合 会長)
発題者 野口定久 (日本社会福祉系学会連合前会長 日本地域福祉学会)
藤森雄介 (日本仏教社会福祉学会 淑徳大学)
石川易司 (日本福祉文化学会 桃山学院大学)

